

2011年 6月5日・東京民報「本」欄では

「事故を予言した詩」と話題に 若松丈太郎著「福島原発難民」

福島第一原発の事故を受けて、コールサック社は緊急企画として「福島原発難民」を5月10日に出版しました。著者は、福島第一原子力発電所から25^{キロ}ほどの南相馬市に住む詩人、若松丈太郎さん。福島県文学賞や福田正夫賞などを受賞しています。

若松さんは高校教員として働きながら、郷土史や地域出身作家の文学研究などにも携わり、40年以上、原発の危険性への警告を発信。「安全神話」を批判してきました。

同書は、原子力発電所建設前後から今年の4月までの40数年間に書いた詩、エッセー、評論などをまとめたものです。

巻頭の詩「みなみ風吹く日」（「北緯37度25分の風とカナリア」所収）は、同地で見聞きした、自然環境の小さな異変や繰り返される原発事故を告発する作品。「チェルノブイリ福島県民調査団」に参加し、帰国直後に書いた作品群のひとつです。

「大熊一風土記71」は、原発の運転が開始された1971年に書いたエッセーで、原発が建つ大熊町が誘致による税収の増大などで活況を呈する様子を書いたもの。

「詩に書かれた原子力発電所」などの評論は県内の歌人、詩人の作品を概説しながら紹介する労作で、胸を打ち、読み応えがあります。

出版に前後して、東京新聞、河北新報、岐阜新聞で紹介され、インターネットでも評判を呼んでいるのは、詩「神隠しされた街」。チェルノブイリ原発事故で消えた街プリピャチ市に、自身の住む南相馬市など福島原発の30^{キロ}圏内にある街を重ね、事故後の強制退去を「神隠し」と表現した作品です。「17年前に事故を予言した詩」として話題になり、ビキニ環礁の水爆実験で被曝したマグロ漁船をテーマに「核」の問題を発信する詩人、アーサービナードさんによる英訳・出版も予定されています。

著者の目は東京にも向かいます。

5月に書きおろした「原発難民ノート」では、東京都知事の「津波は天罰」との発言に「あたりまえに、まっとうにいきているのだ。罰当たりなことばを口にするな」と怒りを込め、原発問題は、都市生活者と共通するもの、とのメッセージも随所に見られます。

と紹介されています。